

緑の新潟から熱風の横浜へ

安藤 廉*

早いもので、緑したたる新潟のフェアウェーから、熱風うず巻く横浜へ来て、既に5カ月が過ぎてしまいました。新潟の皆様方には私の転出に当たり、心温まる会を何度も催して頂き、誠に有難う御座いました。

さてこちらへ移って以来の猛暑は、まさに首都圏における営業環境を象徴する様な凄じさでした。赴任当初は、爽やかな薫風の中からいきなり猛火の中へ投げ込まれた様な気持ちになったものです。私は15年前東京湾の埋立地の地盤調査をやっており、ヘドロの海と鉄の街から逃げ出して来た訳ですが、久しぶりに見た東京海岸のあまりの変わりように、啞然としてしまいました。ランドマークタワーやヨットの帆のようなホテルを備えた国際会議場、ベイブリッジとそれに続く鶴見航路橋等の巨大な建築物は、とても人の作ったものとは思えない、異様な威圧感を持っています。見渡す限り全てのものが、人工物というのは、自然を見慣れた目には、なかなか短時間では受け入れ難いものがあります。

環境といっても、首都圏の環境とは大気・土壌・地下水の汚染状況や、騒音振動レベルの問題とかであり、自然環境ではありません。従って、新潟では環境調査というと、植生とか生態系の調査とかでしたが、こちらでは環境調査とは公害調査の様なものです。とはいえ、横浜市が約330万人で、新潟県全体のほぼ1.5倍にもなるのですから、当然のことかもしれせん。

しかし、街中や住宅地には意外と緑地や森が多く、私の家でもやぶ蚊がやたらといて、蚊に刺されると我が家の周りは自然が残っていると、変に納得しています。またびっくりしたのは、直系5cmくらいの大きな蜘蛛が各部屋に一匹ずつ住み着いていることです。こちらの人は「タカアシグモ」と呼んでいますが、異様に足の長い敏捷性に富んだ蜘蛛で、ゴキブリを食べてくれるとかで、殺してはいけないのだそうです。最初はそんなことは知らず、階下で女房のものすごい悲鳴がし、何事かと思ったら、巨大な蜘蛛が部屋のすみにおり、こちらもたまげたけれど逃げる訳にもいかず、フマキラーで弱らせてから取り押さえました。今でも時々、すさまじい悲鳴やかわいらしい悲鳴がどこかの部屋で上がりますが、知らん顔です。

近代的な建築物や満員電車や巨大な蜘蛛にも、ようやく慣れたこのごろですが、そろそろ秋の例会の時期だなあと感じるにつけ、新潟応用地質研究会の存在の意味を今更ながら重く感じております。立場や所属や年齢に関係なく、一つの分野に偏ることもなく、私たちを取り巻く自然と人の営みに関する全ての研究や技術に対し、自由に発表し議論出来る場所があることは、誇りにすべきことと思います。またそのような風土と文化のある新潟はすばらしい所です。新潟応用地質研究会の更なる発展と、会員の御活躍を心からお祈り致します。

*応用地質(株)横浜支店